

慧林性機年譜稿

大 槻 幹 郎

はじめに

慧林性機は、黄檗山萬福寺第三代住持となった僧である。承応3年（1654）隠元隆琦に随従して渡来し、隠元を扶け黄檗宗の弘通に貢献した。道号を独知、法諱を性機。のち号を慧林といい、これを道号として用いる。その伝記には下記のものがあるが、二十字十行半面で三丁乃至四丁分の簡略なものである。そこで編年体のやや詳細な年譜を試みた。その資料は行状及び語録その他である。しかし周到な検討は不十分で、第一次稿本に過ぎないが取り敢えず発表し、叱正を得たいと思う。

使用した主な資料は次のもので、（ ）は本文中に挙げた略称である。なお本文中の〈 〉は筆者の注記である。その余については注記したが省略した。

- ① 行繇〈自伝〉、仏日慧林禪師語録卷六所収。（行繇）
- ② 黄檗第三代慧林和尚行状。天和元年嗣法門人〈香国〉道蓮状（行状）
- ③ 黄檗第三代慧林和尚機公塔銘并序 天和二年法姪性激高泉撰（塔銘）
- ④ 摩耶山仏日寺林機禪師伝。仙門浄寿 黄檗譜略所収（黄檗譜略）
- ⑤ 黄檗堂頭慧林大和尚末後日録 天和元年〈別伝〉道経・〈石雲〉道如等述（末後日録）
- ⑥ 慧林著作
 - イ）滄浪声 上下二巻 寛文6年刊記
 - ロ）仏日慧林禪師語録 一巻
 - ハ）仏日慧林禪師語録 十巻 寛文9年刊記
 - ニ）耶山集 上中下三巻 延宝6年刊記
 - ホ）慧林禪師語録 六巻 元禄16年跋

2 慧林性機年譜稿

へ) 仏日慧林和尚七十寿章 一卷

⑦ 黄檗開山普照国師年譜 (普照年譜)

⑧ 黄檗二代賜紫木庵和尚年譜 (木庵年譜)

⑨ 仏国開山大円広慧国師紀年録 (大円広慧紀年録)

⑩ 端山正和尚紀念録 (端山紀念録)

西暦 年号 干支 年齢 記事 注及び参考

1609・明万曆39年己酉9月8日生 1歳

福建省福州府福清県の人。宋の一弘先生鄭俠の裔。家居は県の南門小橋にあり、父は鄭華斗。邑の廩生となり、明経科に当選したが早く没する。母は邵氏。三男ありその季子。諱を宗鼎。幼より儒業を受け庠生となったが、寺院に至れば徘徊愛慕して終日去るに忍びずという (行録・行状)。

註

(1) 鄭俠、福清の人、字介夫。治平進士、王安石の改革に当り旧法党に属し、神宗の時英州に徙刑、哲宗の時帰り、徽宗の時元の官に復したが、蔡京が権力を振うに及び郷里に帰った。自ら一拂居士と号し、没後里人が村里の門に鄭公坊と掲げた。『西塘集』がある (中國人名大辞典による)。

1641・明崇禎14年辛巳。33歳。

中年に及び禪への関心が高まる。

(参) 行年三十有三。方補弟子員。改諱鏊。雖得寸進、而貧如故。惟素性好與方外交。即窮年肄業。喜居蘭若、或万裕城石塔、或館湖心開化、或静攝福唐斂石、皆所興遊而燕处焉。且日随茹素、朝昏課誦、跡塵寰、心物外。嘗取經語録讀之。粗識明心之旨、已非一日。但以青氈故業 (行録)。

1644・明崇禎17年・清順治元年甲申 36歳

明末動乱の中で仏教帰崇の念強まる。

(参) 迨歳甲申、国鼎変移。冠裳毀裂。丁乱離於困厄、脱万死於一生。皆藉仏天慈庇、且念仏門广大 (行録)。

1648・明永曆2・清順5年戊子 40歳

8月3日福州府閩県九仙山麓の補山万歳寺祇園弁公を礼して薙染し、法名を如祖、字を繼之という (行録)。

(参) 至季四十，丁国難，遂悟世幻，投万歳寺祇園卉公薙染（行状）

1649・清順治6年己丑⁽²⁾ 41歳

この年黄檗山萬福寺の隠元隆琦⁽³⁾に参謁し，冬具足戒を受ける。時に維那即非法兄の請益を受け，また後堂心盤師伯に参尋，隠元の上堂に値って問法する。

註

- (2) 出家の時期について，行繇には，遂抛家棄産，詣福城萬歳寺，礼祇園大徳為師。即於己丑八月初三日薙染。法名如祖。字繼之。時年四十也。とあり，干支と年令に齟齬がある。年令を正しいとすれば干支は戊子に当たる。法嗣香国の「行状」も年四十とあるところから，年令を以って出家の年とした。しかし干支に信をおけばこの年となり，隠元参謁と同じ年となる。黄檗山に隠元参尋は己丑年が正しいと思われる。なお調査に俟ちたい。
- (3) 然思向上志立。便当撇脱参方。以了生死大事。始不愧出儒人禅之操，因决志往参黄檗隠和尚。是時邑中諸同社縑素，迺為之喜，作詩成帙，餞送入山（行繇）。

1650・清順治7年庚寅 42歳

1月15日解制，記室を命ぜられる。

(参) 命堂記室，凡内外文翰莫木応副（行状）

隠以其出自儒門，閑于文翰，命掌記室（譜略）

1651・清順治8年辛卯 43歳

法兄也嬾性圭，崇福寺の請に応じて渡航し，程なく水難に遇う。

(参) 夏鳳山也嫩性圭長老，応日本崇福請，挙為座元秉弘。未幾東渡厄於水（中略）結冬衆将万指，分為兩堂，立慧門沛・木庵瑯為座元，虚白願・即非一為西堂（普照年譜）

1653・清順治10年癸己 45歳

春客司となる（行繇）。

1654・清順治11年＝日本承応3年甲午 46歳

この年また記室となる。隠元東応の事あり，5月10日師に随って厦門⁽⁴⁾に到る。ときに名を改めて性機，字を独知という（行繇）。

6月21日開帆し，7月5日晚長崎に抵る（同上）。

註

- (4) 值扶桑国書幣到山，敦請本師和尚航海行化。而師自知縁熟彼国，欽然允諾。令発從

4 慧林性機年譜稿

行曰、航海涉濤、固非細事、爾等意氣、吾樂与遊。若生怖畏、寧勿遠從。山僧毅然前請曰、某甲扶杖、且私壯言、遍謁尊宿、学人飽參、從一以終。吾志不替、遂東裝前驅（行録）。

10月15日興福寺冬期結制、記室となる（同上）。

1655・承応4年＝明暦元年乙未 47歳

6月崇福寺結制、維那に転ず。⁽⁵⁾

註

(5) 五月廿三〈日〉隠元崇福寺進寺。法語五則、即日上堂祝聖。季夏結制、命独知幾為維那。興福孟夏結制兩処坐夏（隠元年譜）。

1656・明暦2年丙申、48歳

9月6日無上性尊が普門寺に來り偈を贈る。

（參）歳丙申九月六日無上弟至普門有引（滄浪声上）

冬期結制に西堂となる（普照年譜）。

（參）丙申普門儀表頗立。是冬四方衲子、輻輳盈室、而山僧腹疾方萌。日夜磨鍊、主宰不揺。病魔退伏、忽打破菓礮。通身汗下、而嘆曰、趙州青衫、今日看破了也。亦不求証。惟自領之。同參只見山僧有遣病之功、殊不知正是山僧平生得力放身命処。惟本師得知、故開爐首唱、遂命山僧為西堂。一職六載（行録）。

1657・明暦3年丁酉 49歳

6月隠元より「夫眼不円明云々」の法語を示される。⁽⁶⁾

註

(6) 示独知西堂（扶桑語録卷八 法語）

〔款記〕丁酉季夏普門丈室老僧隠元、示独知西堂《個人藏》。

1658・明暦4年＝万治元年戊戌 50歳

9月6日隠元が江戸へ赴き、普門寺監守を命ぜられる（行録）。

9月29日諸禅友と西來亭に登り、江戸の諸昆仲に書を寄せる（滄浪声卷下）。

12月14日隠元らの帰寺を迎える（普照年譜）。

1659・万治2年己亥 51歳

2月20日隠元が山城淀城主永井信斎居士に宇治へ招かれたのに随従する。

(参) 永井信齋居士備舟請遊宇治，宿宝林，登朝日山礼石大士，過平等院舟同。士迎至別業（普照年譜）。

(参) 遊宇治宿興聖宝林寺。時己亥春二月二十日云々（滄浪声下）

6月18日隠元，大老酒井忠勝より將軍の命として，京辺に一寺開創せよとの報に接し，受諾の書を送る。

(参) 〔酒井忠勝書状〕(前略) 故相洛辺之攸賜可營梵宇之地云々《黄檗山藏》復空印老居士，（前略）近京開創木敢違命云々（普門草録）

これより龍溪，隠元に地を擇ばしめ宇治太和山を望み，上奏して允許される（普照年譜）。

1660・万治3年庚子 52歳

6月6日無上性尊の三七之辰に当り祭文を作る（仏日慧林語録卷十）。

12月15日隠元に代り龍溪と共に太和山寺地を交領する。

(参) 登妙高峰，庚子冬代本師交領太和山地（慧林禪師語録卷五）

京都所司代 牧野親成家臣，原団之丞 正継記。万治三年十二月十六日条（前略）昨日大和田村にて隠元寺独知・龍慶[〃]兩人方へ引渡す旨云々（黄檗文華23号）。

1661・万治四年=寛文元年辛丑 53歳

2月10日又隠元に代り寺地御礼のため江戸へ赴く。4月朔日龍溪と共に登城し，祝允明書卷を献上，同16日暇乞いに登城する。

(参) こたび唐僧隠元に山城国大和田村にて寺地給はり，黄檗宗弘通の御ゆるしありしを謝し，使僧もて祝允明の書軸を献ず。寺領拝領之為御礼差越候，使僧[〃]独智并龍溪御暇に付裕五龍溪・同三独智被下旨，伊豆守〈松平信綱〉伝之（徳川実紀）

5月20日青木甲斐守重兼に撰津摩耶山仏日寺住持を請われ，赴くに当り隠元⁽⁷⁾の印可を受ける。

註

(7) 〔付偈款記〕寛文元年仲夏念日寓普門老僧隠元書，付独知西堂上座《龍興院藏》。

閏8月29日隠元新黄檗進山（普照年譜）。

6 慧林性機年譜稿

10月15日隠元の意をうけ開堂結制。

11月7日隠元七十祝寿に当り、登槩して秉弘を命ぜられ、ときに慧林と号する（行繇）。

同月19日師翁費隠通容の計を聞き祭文をつくる（仏日慧林語録卷十）。

この年仏日檀越青木氏映田貳百石を喜捨し、僧糧となす（端山紀念録）。

1662・寛文2年壬寅 54歳

この年山内に開山隠元、第一代慧林、開基端山の寿塔が建立され、寺の西門外に檀越青木直影〈重兼弟、興石居士〉により緑野軒⁽⁸⁾を建立、宴息所兼延客寮とされる（端山紀念録）。

註

(8) 緑野軒十詠（滄浪声卷上）

1663・寛文3年癸卯 55歳

1月15日黄檗山において將軍の令旨により祝国開堂が行われ、命ぜられて分座説法する（行状）。

同月檀越重兼黄檗山より回り、林間偶憩所として小築を構え扁して聴松と曰う。七言律五詠あり（滄浪声卷上、聴松堂）。

4月16日湯山への途中山寺に遊ぶ。

（参）歳癸卯夏四月十六日往湯山途中・遊中山寺憩宗長信士園（滄浪声卷上）。

12月黄檗山第一開戒、尊証阿闍黎となる（本山歴代戒壇執事記）。

この年仏日の僧堂・齋堂・厨庫・十局寮・小執事寮・至公軒・慈眼室建立始る（端山紀念録）。

1664・寛文4年甲辰 56歳

5月独湛法弟の遠州宝林寺の請に応ずるを送る（滄浪声卷上）。

8月14日仏日寺禪堂落成（同上）。

9月4日隠元が松隠堂に退隠し、木庵法兄黄檗第二代住持となる（普照国師年譜）

9月即非法兄の留別・高泉法姪が丹羽玉峰居士の請いに応ずるに偈を贈る（同上）。

同月8日慧林五十六の祝寿に当り、新建堂舎について祝国開堂を請われ、開山第一代とされる。法姪高泉性激が白槌となる（仏日慧林禪師語録卷一）。

1665・寛文5年乙己 57歳

1月15日解制の日、松隠堂の隠元を省観し謝法する（行録）。

2月堂頭木庵の黄檗第二開戒に羯磨阿闍黎となる（戒壇執事記）。

9月19日本師隠元を仏日寺に請う。

（参）季秋十有九日慧林西堂請遊仏日寺（松隠集卷一）

1666・寛文6年丙午 58歳

2月有馬温泉に赴く。

（参）歳丙午仲春登有為温泉山（滄浪声卷上）

歳丙午季春二日同無心弟・別伝・珠光・天倪諸子、登温泉愛宕山（滄浪声卷下）

7月29日法兄慧門如沛の訃報〈康熙3年甲辰10月6日示寂〉に祭文を作る（仏日慧林語録卷十）。

1667・寛文7年丁未 59歳

1月18日維摩善慧龐蘊三大士開光（仏日慧林語録卷十）。

（参）召鑄工某於麻田、範金銀古銅鑄、釈迦文殊普賢觀音維摩達磨傅大士龐居士像（端山紀年録）

3月3日諸徒と共に重ねて箕面滝に遊び、新建の観音殿に憩う。

（参）丁未年修禊日重遊箕面山龍潭、憩新建観音殿、作此示從遊諸禪（滄浪声上）。

5月有馬山清涼院に遊ぶ。

（参）丁未仲夏遊湯山清涼院（同上）

7月法弟南源性派が訪れる。

（参）歳丁未秋七月南源師弟見訪、全慈眼室話雨（同上）

この年6月2日長崎崇福寺化林性侯が寂し、輓偈を贈る（同上）。

1668・寛文8年戊申 60歳

4月「鷹尾山多田院重興記」を書く（慧林禪師語録卷六）。

8 慧林性機年譜稿

7月12日檀越木重兼、両序、執事らに方丈において行繇を説く。

(参) 師六旬解制前三日、檀越青木甲斐大守、同両序執事具香詣方丈請説行繇(仏日慧林語録巻六)。

9月8日六十の誕辰り当り本師隠元より偈を受ける。

(参) 仏日慧林法子六十初度偈以示之(松堂統集巻二)

9月登槩して隠元を省覲し、諸子と醍醐山・八幡山に遊ぶ。

(参) 九月喜仏曰法子至山(松堂統集巻二)

季秋会吼源二師弟遊醍醐山季秋同眉法弟心禅姪遊八幡山二首(滄浪声巻下)

この年より華嚴經・法華經・涅槃經の書写をはじめ、三年に足らずして功をおわる。

(参) 師将六旬、力持大法、又矜細行。牧禪之暇 手書華嚴法華涅槃諸經、雖寒溽暑 足不踰堂、未及三霜而功竣(行状)

この年逸然性融が寂し輓偈を贈る。

(参) 輓幻寄独融禅徳(滄浪声巻下)

1669・寛文9年己酉 61歳

3月黄檗堂頭木庵が毘舎竣功を將軍への謝恩のため、江戸へ赴くに当り送偈を贈る。

(参) 三月再進江府謝建利(木庵年譜)

歳己酉春三月送黄檗木庵法兄再至武城(滄浪声巻上)

11月示寂した受業師祇園の祭文を作る。

(参) 祭落髮師祇園老人文(仏日慧林語録巻十)

1670・寛文10年庚戌 62歳

この年黄檗堂頭木庵、青木重兼建立の江戸白銀台紫雲山瑞聖寺開山となる(木庵年譜)。

1671・寛文11年辛亥 63歳

6月高泉・独照性円が訪れる。

(参) 初夏喜高禅師至(滄浪声巻上)

辛亥初夏鳳山和尚見訪（耶山集卷中）

次韻答照禪師見訪（同卷上）

8月独照・月潭，別伝・喝雲・香国・自鍊らと高雄山に遊ぶ。

（参）中秋日重遊高雄山，同照弟，潭公，伝・香〈国〉・〈自〉鍊・普・洞〈徹〉諸子（耶山集卷上）

この前後東山泉涌寺ほか京都の古刹，ついで高野山・長谷寺・興福寺を巡り，嵯峨直指庵独照・月潭を訪う。

（参）遊東山泉涌寺・贈戒光天主長老・過洛京古刹・登高野山・謁弘法大師入定所・遊大和州長谷寺・南都觀風・遊興福寺・過内山永久寺・遊春日大明神・訪直指禪師・峩峰潭公迎余錫呈詩（耶山集卷中）

9月高泉より祝寿の偈を贈られる。

（参）法苑禪師以詩祝余六十三寿（耶山集卷上）

11月本師隠元八十寿章を贈る（黄檗開山隠老和尚八十寿章）。

1672・寛文12年壬子。64歳。

9月檀越端山居士が民部重正を後嗣として致仕し，摩耶山北麓に旅泊軒・竹岩院を構え，阿弥陀如来・観音菩薩檀像を自刻，仏日開山堂に隠元・独知・自らの寿像を安置する（端山紀念録）。

（参）九月贈端山居士致仕偈（木庵年譜）

病辞官采隠，拳民部重正為継家・号改端山，烟邑耶山北麓新造別業一所，額曰旅泊軒，曰夢住，曰竹岩院・沈木香木自彫阿弥陀円通大士長三寸許・仏日開山堂於聽松軒南，安隠和尚慧和尚并師寿像（同上）

1673・寛文13年＝延宝元年癸丑 65歳

2月24日隠元の病の報に登槩し，松隠堂に省観する（黄檗開山隠元老和尚末後事実）。

4月3日隠元示寂（普照年譜）。

9月5日法兄木庵が訪れ，祝寿の偈を贈られる。

（参）癸丑重陽前三日法兄木和尚過訪兼祝誕辰有詩見贈（耶山集卷上）

1674・延宝2年甲寅 66歳

10 慧林性機年譜稿

7月別伝道経が住山のため辞するに当り法を付す（黄檗宗鑑録）。

（参） 甲寅秋別伝経上座告辞住山付（慧林語録卷三）

9月8日誕辰に当り黄檗山漢松院独吼・法苑院高泉・慈福院悦山三禅師から
寿詩を贈られる。

（参） 漢松法苑慈福三福師以寿詩見祝（耶山集卷下）

9月同国多田の舟峰に登り、六和精舎に宿る。紀詠五首がある。

（参） 登舟峰絶頂宿六和精舎五首、甲寅秋九月（耶山集卷下）

無範徒請多田六和精舎（滄浪声卷上）

この年青木甲斐守重成子重矩来謁する。

（参） 甲斐守公子見謁 年正総角（耶山集卷下）

1675・延宝3年乙卯 67歳

4月石雲道如入室、法を付す（黄檗宗鑑録）。

（参） 乙卯夏石雲如上座入室（慧林語録卷三）

この年黄檗山塔頭寿泉庵玄覚道成の斎に应ず。

（参） 応寿泉玄覚庵主供（耶山集卷中）

1676・延宝4年丙辰 68歳

4月法嗣別伝、石雲が省観する。

（参） 喜別石二長老同至 丙辰初夏（耶山集卷下）

1677・延宝5年丁己 69歳

春夏之交洒井信岩居士に招かれ、別伝ら諸禅人と比叡山に登り、大津青龍寺
に宿る。

（参） 丁己春夏之交洒井信岩居士、請遊天台若耶五台、亀峰〈虎林中〉度長
老賦二長篇・洒井信岩居士迎余錫於若州家舎賦謝（耶山集卷上）

登天台随喜伝教大師道場、同舟峰〈別伝〉長老暨諸禅人等・宿大津
青龍寺（耶山集卷中）

この頃丹後より但馬に至る。

（参） 遊五山智恩寺（耶山集卷下）

自丹後至但馬宿大橋氏宅（耶山集卷上）

9月智積院泊如運僧が有馬温泉に寓し見訪する。

(参) 丁巳秋抄寓温泉泊如僧正見訪(同上)

秋抄寓温泉, 泊如僧正有詩 見贈依韻答之(耶山集卷中)

この年摩耶山開山堂落成し, 本師と檀越二像を安置する。

(参) 恭造開山隱老人法像・摩耶開山堂上梁・摩耶開山堂落成二首, 本堂師
興檀越二像配享(耶山集卷上)

秋法姪高泉が訪れる。

(参) 喜高泉和尚至(耶山集卷中)

是秋再入〈有馬〉温泉題十二景(大円広慧紀念録)

1678・延宝6年戊午 70歳

1月灯節日華藏院南源性派耶山集序文を書いて贈らる(耶山集序款記)。

9月8日古稀に当り, 檀越青木重成・別伝座元式盧山大舟寺を創建して開山
に請われる。

(参) 延宝戊午年師届古稀, 太字同別座元就盧山創大舟寺, 屈師為開山, 師
愛其林壑幽邃有終焉之志(行状)

誕日上堂し, 木庵以下寿章五十七章を贈られ, 自祝偈を加え, 『仏日慧林和
尚寿章』として開板される。

時に惟一道実老姪見賀さる。

(参) 惟一老姪見賀開式盧山(耶山集中卷)

10月15日冬期結制。洒井信巖居士に上堂を請われる(慧林語録卷一)。

1679・延宝7年己未 71歳

1月7日病を發し, 7月に到って癒える。

(参) 人日病起・己未秋孟病愈(耶山集中卷)

3月黄檗堂頭木庵, 青木端山が同国川辺郡末吉村に大覚山方広寺を建立して
開山に請われ, 時に仏日寺に訪れる。

(参) 端山首座 請師為大覚開山, 師於延宝己未三月初九 就本山結七日期
云々(黄檗木庵和尚統録卷一)

喜法兄木和尚至(耶山集中卷)

12 慧林性機年譜稿

6月大暑日青木甲斐守重成を訪い、夏日端山を方広寺方丈に訪ねる。

(参) 大暑日訪青木甲斐守・暑夜全端長老方広丈室塵談(耶山集下卷)

7月登槩し華藏院南源・瑞光院千呆らに会い、伏見天王山仏国寺に高泉を訪う。

(参) 詣槩山華藏和尚以詩喜至(耶山集上卷)

喜瑞光呆法姪至・喜広寿雲法姪至・新秋訪天王山仏国高泉和尚(同中卷)

9月9日端山・別伝らと竹岩院に登る。

(参) 重九全端長老伝座元暨黄槩龍侍者、登竹岩院聽瀑(耶山集上卷)

1680・延宝8年庚申 72歳

1月19日黄槩山萬福寺第三代住持となり晋山する。

(参) 延宝八年春正月 黄槩合山大徳并宰官居士等奉上旨; 請師住萬福寺、以本月十九日入寺云々(慧林禪師語録卷二)

5月8日黄槩山檀越四代將軍家綱薨じ、病のため行く能わず、監寺廓山道昭が東叡山に代参、本山に位牌を立てる。

(参) 夏五月敵有君薨、師慮槩山賜地建殿実係国恩、因病不能親造、遠差廓山監寺于東叡山致奠、就立神主於本山公祠(黄槩譜略)

8月19日後水尾法皇崩じ、泉涌寺に拈香する(同上)。

9月初め香国道蓮・晦巖道熙・黙堂道轟に付す(慧林語録卷三)。

9月28日繼席御礼のため江戸に赴く(黄槩遞代譜略)。

時に紫雲山瑞聖寺に寓し、青木重成、遠州宝林寺独湛性瑩に上堂に請われる(慧林語録卷二)。

また了翁道覚に請われ「武州東叡山経蔵序」を作る(同上卷六)。

10月15日冬期結制、酒井信巖が期主となる(同上卷二)。

1681・延宝9年=天和元年辛酉 73歳

1月15日解制後旧疾屢おこり、衆甚だ憂い、万松岡の東に寿蔵を営み、塔頭龍興院を建立する(行状)。

夏肥前柳川立花飛弾守広茂、父好雪忠巖居士を薦するため上堂を請う(慧林

禪師語録卷二)。

9月22日第五黃檗三檀戒会を円戒，受戒の緇素五百人余という（行状・本山歴代戒壇執事記）。

10月1日旧疾また萌し，華嚴院惟一，紫雲院木庵・漢松独吼らが見舞う（以下末後日録）。

10月3日達磨忌に当り，像を法堂に移す。以後初祖忌にはこの例となる。この日開山堂及び法堂の聯を書き刻せしむ。

同月6日霄外侍者を仏日寺高泉の祝寿に差す。

同月13日冬期結制のため廓山を都監寺となす。

同月15日結制，陞座する能わず示衆法語并に遺囑語を書す。龍興院を香国に付囑する。

同月19日晦岩省観。

20日黙堂維那の為に自賛を題し，午後木庵を夜には独吼を請うて別れを叙べる。

22日別伝に命じ知浴宗久の為に結制法語を書す。

23日檀越青木甲斐守に謝恩しなお護持を頼む。

24日仏高泉五十の寿詩を書し，酒井信巖に示偈を書く。

25日初山独湛に住持のことを叙す。

30日酒井修理大夫に使を差す。

11月1日病体漸く羸り精神もとの如し。

3日開山忌・4日愍忌に侍者を遣す。

5日別伝に冬制の浴主宗久等への法語を説き書せしめる。

8日法弟独湛より復書至り，次期主席に人を得たことを喜び，近藤語石居士へ多年の法護を謝す。

9日湯を索め浄髪沐浴更衣して後事を囑す。10日身心軽快の状あり。

11日病勢已に極り，別伝・石雲・廓山・香国等牀に列る。遺偈を乞い曰く，「東也錯，去也錯，一隻舄鞋，活如龍，打翻筋斗，錯錯錯」。筆を置いて睡に就き，未時に至り左右をして扶起せしめ，端坐。時に端山室に入るや泊然

14 慧林性機年譜稿

として寂す。十一月十一日未時であった。世寿七十三，僧臘三十四（以上末後日録）。

剃度弟子道轟・道森・道水・道意等若干人。付法弟子式廬山別伝道経，東禅寺石雲道如・龍興院香国道蓮・指柏軒晦蔽道灑・瑞巖寺黙堂道轟・月溪庵喝雲道威。居士高龍川・酒井信巖等若干人（塔銘）。